

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：34414

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26780407

研究課題名(和文) ロールシャッハ法における色彩ショックの発生メカニズム解明と、解釈法の整理

研究課題名(英文) Mechanisms of color shock in the Rorschach test and interpretation methods

研究代表者

安田 傑 (YASUDA, Masaru)

大阪大谷大学・人間社会学部・講師

研究者番号：40631966

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：ロールシャッハ法における色彩ショックのメカニズムについて、赤色知覚による回避的な動機づけが生じ、注意範囲の狭化が生じるために反応性が低下するという仮説を立てた。この仮説の検証のために、健常者のロールシャッハ法実施下における眼球運動に関する先行研究の整理を行った。また、健常群と臨床群の眼球運動をメタ分析により比較し、眼球運動の指標が両群を区別する十分な妥当性を有していることを明らかにした。また、色彩ショックと、回避的な動機づけの指標であるドットプローブ課題の間に関連性が見られた。この知見は、本研究における色彩ショックのメカニズムについての仮説の一部を支持するものであった。

研究成果の概要(英文)：Mechanisms of color shock in the Rorschach test were investigated, by proposing the following hypothesis. Responsiveness declines because of evasive motivation caused by the perception of red with the narrowing of the range of attention. In order to test this hypothesis, previous studies on eye movements of healthy adults during implementing the Rorschach test were reviewed. Moreover, eye movements in healthy and clinical groups were compared through meta-analysis. Results indicated that eye movement indices were sufficiently valid for distinguishing the two groups. Furthermore, correlations were suggested between color shock and the dot-probe task, which is an index of evasive motivation. The above findings partially supported the hypothesis of this study.

研究分野：臨床心理学

キーワード：ロールシャッハ法 色彩ショック 眼球運動

1. 研究開始当初の背景

ロールシャッハ法は、本邦の心理臨床実践において重要かつ使用頻度の多い心理検査であり、総合的な人格理解を可能にする多数のロールシャッハ変数から構成されている。このうち、クライアントの情動刺激への耐性の低さを示す指標の1つである色彩ショックについては、基礎研究では妥当性を否定する結果が多く得られている一方で、臨床現場では経験知に基づく一定の支持が得られている。このような、色彩ショックの妥当性に関する基礎研究と臨床経験の齟齬を解決するためにも、ロールシャッハ法では知覚的なメカニズムに踏み込んだ研究が不可欠と考えられた。

2. 研究の目的

色彩ショックの発生メカニズムとして、赤色知覚に起因する回避動機づけが視覚的注意の狭化を引き起こして反応産出を困難にするという仮説 (Fig. 1) を提唱し、この仮説に基づく妥当性の検証を行うことを第1の目的とした。加えて、メカニズムの解明から得られた知見をもとに、色彩ショックの指標と解釈仮説を回避動機づけの観点から整理し、臨床的な有用性の高い解釈法を提唱することが第2の目的であった。

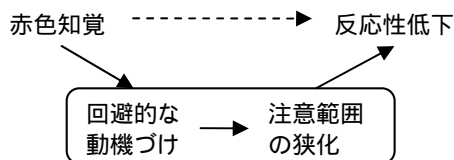


Fig.1: 色彩ショックの発生メカニズムの仮説

3. 研究の方法

(1) 眼球運動分析の基礎研究

色彩ショックは、クライアントの情動刺激への耐性の低さと解釈され、情動的過敏性を示す神経症的な傾向を意味する指標である。この指標に該当する者は、健常群よりも臨床群に多いと思われるため、まずはロールシャッハ法実施下における健常群の眼球運動過程を明らかにし、加えて、健常群と臨床群の眼球運動過程の差異について検討することが先決と判断した。このため、色彩ショックの研究に先立ち、以下の2つの研究手続きが採用された。

健常者の眼球運動過程の文献調査

健常者におけるロールシャッハ法実施下の眼球運動に関する先行研究として、国内外の学術書・査読つき学術論文を収集し、その内容を整理した。

健常群と臨床群の眼球運動過程のメタ分析

臨床群の中でも、ロールシャッハ法実施下における眼球運動に関する先行研究が多い

統合失調症群に焦点を当て、健常群との眼球運動の比較を、11本の文献を用いたメタ分析により行った。

(2) 色彩ショック時の眼球運動分析

健常大学生20名に対し、通常のロールシャッハ図版に対する眼球運動を測定し、図版提示直後の5秒間の眼球運動データを注意範囲の指標として扱うこととした。また、回避的な動機づけに関する外的指標として、不安を測定する質問紙2種 (STAI, CES-D) と、脅威語を用いたドットプローブ課題を実施し、ロールシャッハ法の初発反応産出時の眼球運動との関連性を調査した。

4. 研究成果

(1) 眼球運動分析の基礎研究

健常者の眼球運動過程の文献調査

文献調査により、健常者における図版提示後の眼球運動について、一般的傾向を明らかにした。

まず、多くの健常者は、ロールシャッハ図版を提示された直後に図版上部に対する0.20-0.35秒程度の初回注視を行い、それから各領域を対象とした探索的眼球運動に移行する傾向が見られた。

この探索的眼球運動には、図版とパーソナリティの両方の影響が見られた。例えば、赤色を含む図版では、初回注視以降の探索的眼球運動において赤色領域への注視を行いやすく、また、抑制的なパーソナリティ特性の者は色彩領域に対する注視時間・注視回数が多くなることが確認された。各領域に対する一通りの探索的眼球運動が終了すると、特徴的な注視パターンを見出すことは困難になっていた。

反応産出直前に見られる眼球運動の傾向として、小部分領域への反応では、反応産出の約6秒前から反応領域に対する注視の平均時間に目立った増加が見られ、反応産出前の3.5秒の間にピークを迎えることが先行研究から明らかになった。このことから、潜在的に知覚した概念を反応産出に向けて構成する過程は、おおよそ反応産出の6秒前から3.5秒前までに行われ始めると推測された。ただし、小部分反応の53.8%では、反応の発声開始時点ですでに反応領域とは別の領域に注視が移行しており、反応領域に対する平均注視時間も反応開始直後から急激に減少していた。このことは、反応の構成時には反応領域に対する注視が必要となるが、反応産出が開始された時点では当該領域への注視はすでに不要となり、次反応のための探索的眼球運動が行われることを反映しているものと予想された。

この研究は論文化され、ロールシャッハ穂を専門とする国内学術雑誌であるロールシャッハ法研究に掲載されている。また、心理学の国際的な学術大会 (31st International Congress of Psychology) にて口頭発表を行

う予定である。

健常群と臨床群の眼球運動過程のメタ分析

様々な眼球運動指標のうち、多くの先行研究において測定が行われている、注視回数と視線の総移動距離の2変数に焦点をあて、健常群と統合失調症群のメタ分析による比較を行った。その結果、両変数における総合効果量 r はそれぞれ .346, .343 であり、Hemphill(2003)の妥当性基準を満たす高い効果量が確認された。

また、両変数とも総合効果量の統計的異質性は許容範囲であり、公表バイアスの影響も小さいと考えられた。一方で、サブグループ分析ではロールシャッハ法実施下の注視回数に統計的異質性が認められ、その要因について、提示された視覚刺激の大きさによるものと考察された。

この研究については、ロールシャッハ法を専門とする国内学会（日本ロールシャッハ学会）の大会にて、口頭発表が行われた。加えて、心理学の国際的な学術大会（31st International Congress of Psychology）にて口頭発表を行う予定である。

また、この研究は論文化され、心理臨床に関する研究を専門に扱う国内学術雑誌に投稿中であり、修正再審査の査読結果を受けている。

(2) 色彩ショック時の眼球運動分析

調査対象者 20 名のうち、精度の高い眼球運動データが得られたのは 11 名であった。この 11 名に対して、脅威語を用いたドットプロープ課題を実施したところ、単語ペアの提示時間が 0.2 秒間の条件下の注意バイアス得点の箱ひげ図を描くと、1 名が高得点側の外れ値として扱われた。この 1 名の第 2 図版における初発反応は「首が無い熊、血が噴き出ている（要約）」であった。すなわち、脅威語からの注意の解放が特に困難であった対象者には、血液（BI）や反応内容の損傷（MOR）などの形で色彩ショックが見られた。その一方で、他 10 名の初発反応には、BI も MOR もコードされなかった。この結果は、脅威刺激からの注意の解放の困難さを示す者にのみ色彩ショックが見られたことを意味しており、本研究の仮説の一部に沿う結果が得られたと言える。

また、脅威語を用いたドットプロープ課題の注意バイアス得点に関して、得点が高得点側に外れ値となった 1 名と、逆に得点在最も低かった 1 名に関し、第 2 図版提示後の 5 秒間の眼球運動を比較した（Fig. 2）。高得点側に外れ値を示した 1 名の方がやや上部の注視に偏っているが、両者に明確な違いは見られないように思える。

質問紙法に関しては、色彩ショック、眼球運動分析、ドットプロープ課題のそれぞれとの間に、目だった関連性は確認されなかった。

この研究については、ロールシャッハ法を専門とする国内学会（日本ロールシャッハ学会）の大会にて、口頭発表が行われた。加えて、心理学の国際的な学術大会（31st International Congress of Psychology）にて口頭発表を行う予定である。



高得点側に外れ値

低得点

Fig.2 第 2 図版提示直後 5 秒間における注視点

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 2 件)

安田 傑、色・形問題の 2 次元斜交モデルに基づくロールシャッハ色彩反応の検討、こみゆにか（大阪大谷大学人間社会学部人間社会学学科紀要）査読無、Vol.10、2016、pp.1-16

安田 傑、ロールシャッハ法における健常者の眼球運動の過程、ロールシャッハ法研究、査読有、Vol.19、2015、pp.30-36

〔学会発表〕(計 4 件)

Ogawa, T., Iwasa, K., Ishibashi, M., & Yasuda, M. The evolution of the Rorschach in Japan, 31st International Congress of Psychology, 2016 年 7 月 25 日発表確定、パシフィコ横浜（神奈川県・横浜市）

安田 傑、ドットプロープ課題を用いた、色彩ショックのメカニズムと基準関連妥当性の検証、日本ロールシャッハ学会第 19 回大会、2015 年 11 月 8 日、立正大学（東京都・品川区）

安田 傑、ロールシャッハ法における、統合失調症群と健常対照群の眼球運動指標のメタ分析、日本ロールシャッハ学会第 18 回大会、2014 年 11 月 30 日、佛教大学（京都府・京都市）

安田 傑・鈴木千晴、本学会誌の論文で用いられている測定法の頻度調査、日本パーソナリティ心理学会第 24 回大会、2015 年 8 月 21 日、北海道教育大学札幌校（北海道・札幌市）

〔図書〕

なし

〔産業財産権〕
なし

〔その他〕
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安田 傑 (YASUDA, Masaru)
大阪大谷大学・人間社会学部・講師
研究者番号：40631966

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし